

透明なシートを通してみる景色は、まるで大きな水槽の中のような。光の屈折のせいか、向こう側がほんの少し歪んで見える。

四月に入ってから、コンビニやスーパー、郵便局と、次々にレジやカウンターが透明なシートで区切られ始めた。半年前には、誰もが想像すらつかなかったような光景が今では、日常になりつつある。

新型ウイルスは、半年もたたずに世界中に広がった。四月、我が国に緊急事態宣言が出され、テレビは日々増える陽性者数や、外国の悲惨な状況を映し出す。

朝、目が覚めた時に、夢でよかったと思い、すぐに夢じゃなかったと思い返すことが何度かあった。

今日は昨日の続きじゃなくて、明日は今日の続きじゃないのか。

桜は満開で、青い空に花びらが舞う光景は去年と何も変わっていないのに、空の下は大きく変わっていた。

娘がマスクを買う夢をみると言う。店でマスクを見つけて、一人一枚しか買えないので、何度か並びなおして三枚買ったのに、目が覚めたら一つもないと言う。

私が紙マスクを洗って使いまわしをしているのを見て、不安を感じたのかもしれない。

娘が安心できるように、色々な柄の布マスクをたくさん作った。

友人が絵を送ってくれた。疫病除けに効果があるという半人半魚の妖怪「アマビエ」が描かれていた。以来、インターネット上でも、長い髪で口のとがったアマビエの絵をよく目にするようになった。娘のマスクの一つに、その絵を油性のペンで書き写した。

「編集会議をどうしましょうか」

今号のせるの編集会議は、このような状況真ただ中の日取りであった。それぞれが作者に批評を郵送する案や、離れて座っていつも通りに会議をする案が出たが、ネットに詳しいT氏のご尽力で、初のオンライン編集会議が開催されることになった。

最初は少しあたふたしたが、その後は特にトラブルもなく、会議を終えることができた。

それ以降も、オンラインで複数の人と話す機会が度々あったが、大変便利であり、画面を通して話すことは新鮮であったりもした。

ただ、相手の顔を見ているつもりでも、画面上ではうつむいて映っていて、目を合わせて話すことが難しい。また、言葉と顔の映像以外は、ほぼ遮断されており、ふとした仕草や雰

困気は、画面に映らず伝わりにくい。そして、画面を通して見る向こう側は、やはりほんの少し歪んで見える気がするし、向こうからはこちらがそう見えているのだろう。

それはおそらく、コンピュータの性能の問題だけではない。

旅行の予定はすべてキャンセルになり、遠方の人に出会うことはなかなかできないけれど、日常生活の中で、ちょっととした楽しみはある。

自粛期間中、時々公園を散歩していた。春の風が、甘い花の香りを運んでくる。芝生の上で靴を脱ぐと、足の裏がさわさわとする。

友人から、ちょっとおもしろい話を聞くこともある。

レジ前に吊るされている透明なシートを、のれんのように片手でめくりあげて、話しかけようとする人。

視力検査のときに、飛沫が飛ぶのを防ぐため、声を出さずジェスチャーで答えてくれと言われているのに、輪っかの空いている方向を指さしながら「上！」と大きな声を出す人。慣れないことに四苦八苦してるんだなと、つい頬が緩んでしまう。

透明なシートの向こうで、みんな泣いたり笑ったりして、日常を過ごしている。まるで、色とりどりの魚が泳いでいて、ゆらゆらと海藻が揺れているように。

漂って泳いで、どこへ向かうのか、そして、どこにたどり着くのか。

パソコンの画面にそっと触れると、硬くて冷たいけれど、その中には無数の世界がある。それぞれに温度があって、匂いがある。そして、優しさがあって、祈りがある。

買い物に出かけた時に、少し歪んだ光景の中、ふと見覚えのある長い髪と横顔が見えた。光の屈折のせいかな、胸元がキラキラして、まるで鱗みたいだ。

急にこちらを振り向き、娘のマスクをじっと見て、とがった口元を少し緩めて去っていった。

私はしばらく、その場を動けなかった。

アマビエは、きっと皆の祈りを聞いてくれるに違いない。